ベストクラス選定理由書

作成者：D班（山中一英　丹所　忍　横山　恵　友弘一志）

科目名称 総合芸術表現研究（夜間クラス）　（担当教員名：初田　隆・木下千代）	
課　　程　：大学院（修士）	開講時期　：　後期
授業形態　：講義・演習	授業規模　：　6 人
インタビュー対象教員名　初田　隆　木下千代 （実施日時：8 月 1 日（火）9:00～10:00；実施場所：総合研究棟 3 階小会議室）	
インタビュー対象受講者名　瀬川和子　土野公子　城村奈都子（電話） （実施日時：8 月 2 日（水）18:00～19:30；実施場所：神戸ハーバーランドキャンパス演習室 4）	

選定理由

学校教育において「美術（図画工作）」と「音楽」は，ともに芸術系の科目でありながら，授業は別々に行われている。本授業では，「美術（図画工作）」と「音楽」を，それらを横断する「総合芸術」として再定義し，人間が潜在的に有している（と想定される）表現力ならびに表現活動の価値や意義を探究するとともに，その過程において，総合的な表現活動の原理や指導方法について学ぶことが企図されている。

授業評価での自由記述ならびに担当教員と受講者へのインタビュー調査から，このねらいを達成すべく種々の取り組みが実践され，受講者もそこに積極的に関与している様子がうかがえた。

１．教員の課題設定と受講者へのかかわり

「音を線で書く」。これは，本授業で提示された音楽と美術を総合する課題の一例である。この課題には，正解がない。それゆえに，どうしたらよいかわからずに戸惑い，他者の前で自らを表現してみせることに，はずかしさを覚える受講者は少なくない。こんなとき，専門性の異なる２名の教員は受講者と一緒になって表現活動を実践した。それは，受講者にとって二つの意味でモデルとして機能したと考えられた。一つは，当該課題におけるふるまい方のモデルとして。もう一つは，総合的な芸術表現を創造するという本授業のねらいを具現するモデルとして，である。この他にも，「五感を横断させるワーク」「身体を介在させるワーク」など「総合芸術」に向かうための課題が次々と仕組まれた。すべての課題において，教員は表現技術を教え込むのではなく，受講者一人ひとりの潜在的な感覚を「ひらく」ことに専心し，そのための声かけを一貫して行っていた。「芸術の本質を考えさせる授業」「頭脳をフル回転させる授業」という授業評価での自由記述は，こうした教員のかかわりと無関係ではないだろう。

２．受講者の思いと課題への関与

受講者は，教員の意図を汲み取りながら，課題に積極的に取り組んでいく思いを語った。芸術科目を教える現職教員である受講者は，勤務校での日々の授業では生徒の反応がとても気になること，だからこそ，本授業の受講者としていかにふるまうべきかが意識され，それが本授業への深い関与をもたらしたと詳説した。

唯一の正解を想定しえない本授業では，様々な自由が許容される一方で，体系化した学びを展開することが難しい。このような性質の授業にあって，受講者の果たす役割は大きい。本授業は，２名の教員の専門性を基礎に，受講者の積極的な関与を得て，教員と受講者がともに創り上げていくものであった。授業評価で記された「チームワークにバンザイ！」という言葉は，本授業の姿を端的に映したものであったにちがいない。

インタビューのなかで教員も受講者も本授業を「楽しい」と語ったのが印象的であった。学びをいきいきと語り合う受講者をみていると，私たちも「授業をみてみたい」「やってみたい」という思いに駆られた。

以上のことから，本授業を平成 28 年度「ベストクラス」として推薦する。